

英語版 子どもと教育ガイドブック「Child and Education」が完成

タガログ語ガイドブック「Bata at Edukasyon」(子どもと教育)が大変好評で、多くの方々の要望により、今年度はその英語版「Child and Education」を作成しました。簡単な英語で書かれています。内容は基本的に同じですが、用語集にいくつかの単語が追加されています。この冊子は、外国人の親のための、外国人の親の視点で作ったガイドブックです。日本に住むほとんどの外国人は、ひらがな、カタカナ、さらには漢字の読み方を知りません。そのことが、タイムリーで正しい情報を受け取ることに障害になっています。この障害から私たちを解放するため、AWEPはシンプルで理解しやすい言葉を使っています。学校がどのように運営されているか、警報が出たときに何をすべきかなど、教育について知っておくべき重要なことを共有しています。すべての情報をより多くの人々が利用できるようにすることが私たちの目標です。この冊子の活用により、より多くの英語話者の方々が日本の学校生活をよりよく理解できるように願っています。

Due to the overwhelming response of the book “Bata at Edukasyon” in Tagalog, we have come up with the English version. The book is entitled Child and Education. This book is written in simple English in accordance with the numerous requests that we have received. The contents are basically the same. There are some words added in the glossary for better understanding. As you may know, this is a guidebook for parents about the school life of the children from the perspective of a foreigner parent. Most foreigners living in Japan do not know how to read hiragana, katakana or even kanji characters. That is why it is a stumbling block to receive timely and correct information. To set us free from this obstacle



AWEP decided to provide simple and easy to understand words. To give us an idea on how the school life operate every year. To show what to do during an Alert on a stormy day. And to share other important things the parents should know about education. Our goal to make all information available to a larger population. And hoping that more English-speaking people would read it for better comprehension of the Japanese school life.

*上記ガイドブックは神戸市『協働と参画』活動助成を受けて制作いたしました。(野田ジーン・訳 勤柄利佳)

「女性による女性のための相談会」への協力

NPO 法人ウィメンズネットこうべが神戸市から受託した「女性のためのつながりサポート神戸」事業に協力団体として参画しました。2021年9月から2022年3月まで毎月1回、神戸市中央区の会場で、女性の専門相談員による相談と食品・生理用品などの物資を配布する相談会を開催。AWEPは実行委員として事前準備、当日の会場運営等を行い、外国人の相談担当としても協力しました。相談会には毎回数名のAWEPボランティアの方も来てくださり、運営に協力いただきました。また、事業終了後は、AWEPボランティアの松浦さんが相談記録の入り、王さんがそのデータ分析と、それぞれご協力をいただき、それをもとにAWEPが報告書

を作成しました。この事業は2022年度も実施が決まり、再び協力団体として参加する予定です。



第6回「神戸コミュニティフォーラム」と街歩き (2021年12/19, 2022年2/6, 2/16,3/13)



コラボでまちの多文化共生を考える

神戸市と神戸国際コミュニティセンター(KICC)が共同して毎年開催している同フォーラム、2021年度はAWEPが企画運営を受託しました。テーマは「私たちのまちの多文化共生をみんなで考える。多文化共生の場をみんなで創ってこよう」。AWEPにとっては初めてのコラボの形で、フォーラムはオンライン形式。グループワークでは、情報伝達、文化交流、地域住民との交流というトピックで、それぞれディスカッションを深めました。司会をAWEPの野田ジーンさんが担当しました。企画のミソは、その後のポストフォーラム。FMわいわいの金千秋さんをガイドに長田の街歩きとワークショップを2日に渡って行いました。フォーラムとポストフォーラムから企画をまとめて、最後は発表会。グループごとに企画案を発表し、コメンテーターから講評をいただきました。出された企画案は実施に向けて進められる見通しです。これまでのAWEPとちょっと違う角度の活動になりましたが、地域の多様な団体がつながり、地元で新たな取り組みが生まれたらとワクワクします。

報告書は右のQRから御覧いただけます。(奈良雅美)



長田の魅了発信の力に

年末のフォーラムのポストイベントとして、長田の多様性をたどる「まち歩き」をオールドカマー編・ニューカマー編と2回に分けて実施しました。参加者は神戸で学ぶ留学生や大学生たち。まち歩きをする中で出会う案内板の多言語表記、人々の生活の糧を生み出す小さな工場、外国人に必要な金融機関や病院の建物、実際のお会いはネット検索で知る情報とは違って彼らの心に深く刻まれたと思います。このまちが長い時間をかけて創り上げてきた少数者にとって生きやすい要素で満ちていること、それが海を渡ってきた人々を引き寄せているのだという理解の広がりとなり、長田の魅力発信の力になることを願っています。(FMわいわい 金千秋)

生産者の声 タイ・バートファン



製品の進捗などについて、普段バーントファンのラダさんとメッセージでやり取りしています。最近、家業などで忙しくなり縫製のメンバーが少なくなったとラダさんはこぼしていました。それでも私たちはもっと勉強してレベルを上げたいと意欲を見せています。最近ブックカバーの制作でやり取りした時、日本語学習のテキストを見せてくれました。「英語も日本語もできなくてごめんなさい、日本語を勉強して、もっとスムーズにやり取りしたいです」と言っていました。2人に5月の総会に合わせて、AWEPにメッセージ動画を送っていただきました。

「皆さんと知り合えて嬉しいです。みなさんの希望の商品で、難しいものはできませんが、私たちにできるものならやります。商品づくりに一杯一杯になります。私たちが忘れずにご支援くださり、商品を買ってくださってありがとうございます。がんばってやりたいと思います。」彼女たちは、新しい製品の試作に取り掛かっています。みなさんにとって、とても身近に役立つ製品ができてくると嬉しいです。楽しみにお待ちください。(奈良雅美)



神戸新聞「週刊まなび」掲載



神戸新聞は、毎週日曜に「まなび」という子ども新聞を発行しています。2021年末にAWEPのウェブサイトを見て取材に訪れてくれたのが、「まなび」子ども記者の当時小学5年生岩崎実結さん。生産者のごこと、製品のごこと、そして活動している私たちのことについて熱心に話を聞いてくれました。次の世代の子どもたちに分かるような説明のできる活動をしているかどうか、話すことによって私たち自身、活動の振り返りをしていく気持ちになりました。

その後、岩崎さんは製品を購入してくださったり、ボランティア活動に参加してくださったりと、積極的にAWEPに関わってくれています。AWEPはいろんな世代が関わり、活動できる場でありたいと思います。(奈良雅美)

わたしの お気に入り



私は、いつも使っているコースターがとてもおすすめです。黒色と白色なのですが、どちらもとても大人っぽくて、落ち着いた色です。手触りも、毛糸で作られていて、なんとなく柔らかさがありました。デザインもおしゃれですが、角が少なくて、丸みがあり、全てに手作りならではのあたたかみがありました。隙間が多いので、飲み物がこぼれると思われるかもしれませんが、心配はありません。木やプラスチックのものは、水を吸わず、コースターから零れてしまいがちですが、よく水分を吸ってくれて、とても使いやすいです。他にも

太鼓なども買いましたが、一番手作りらしいなと思い、今では一番のお気に入りです。以前に子ども記者としてAWEPの活動取材させていただいたときに、この商品を知りました。そして、ホームページを見たときに、やっぱりかわいいなと思い、思わず買ってしまった。よく見てみると、とても細かく編み込まれていて、丁寧に、心を込めて作ってくださっているのだなとよくわかります。少し硬めですが、その分手作り感が大きくて、あるだけでも落ち着けるくらいで、とても好きです。(岩崎実結さん)

フォーラムに参加して



私は第6回神戸コミュニティフォーラムにAWEPのメンバーとして、司会を担当しました。フォーラムには様々な人、教育関係の人、学生、外国人など様々な人が参加していました。テーマは、神戸を多文化共生の街にしようというもので、国籍、出自、言語、宗教や信条、文化など多様な背景をもつ人々が暮らす街にしよう話し合われました。講演者は、スペインを一つのモデルとして挙げ、スペインは、どのような文化的背景を持つ人であれ、受け入れ、評価していると報告されました。たとえばアレクサンドラ・マサンカイはフィリピン出身の俳優ですが、ネットフリックスなど映画に出演しています。彼女のフィリピン人としての外見や演技が認められ、スペインの人びとから評価されています。グループディスカッションでは、学生たちが参加していることが非常に重要だと思いました。なぜなら外国人が教育関係の人がディスカッションに参加し、若者たちが深く考えること

を手助けできたのと、若者たちの新鮮な考え方を私たちが共有できたからです。すべての人々がダイナミックで生産的な議論ができたと思います。私は参加者が熱く語り合っていると感じました。神戸がどのようにすれば多文化共生の街になるか、素晴らしいアイデアを共有しました。ディスカッションを通して、私は神戸が多文化共生の街になるのは間違いないと確信しました。(野田ジーン・訳 奈良雅美)

It was a great opportunity to be part of the 6th KOBE City Forum organized by KICC in cooperation with AWEP which I was assigned the task of being the emcee for that forum. The forum was attended by various personalities, educators, students, foreigners from different groups. The theme was about Making Kobe an Intercultural City. Intercultural city was discussed as “having a diverse population including people of different nationalities and origins, and with different languages, religions/beliefs cultures, and back-

ground.” The guest speaker was able to discuss it using a particular model like Spain, which accepts and appreciates artist regardless of their cultural background as in the case of Alexandra Masangkay, a Filipina actress who is known for her movies shown on Netflix. She was recognized as Filipina, her distinctive looks and her craft was given honor and noticeable feedbacks from the people of Spain. During the time given for discussion among the groups, I realized the importance of having students as participants because they share fresh ideas of the millennials at the same time we have foreigners and educators who were able to contribute their ideas and long experience to enrich the discussion. Everybody used the time for brainstorming and engaging in a dynamic and productive discussion in English. I can see how the participants showed how engrossed they are in the conversation, sharing brilliant ideas on how we could make KOBE a much better city. It is high time to become an Intercultural City.